終わりに

今回の点検・評価は、東洋大学にとって得るものの多い取り組みであった。現在の東洋大学の活動の中から長所といえる点の再認識だけでなく、改善すべき点の発見にも繋がった。否、むしろ東洋大学はまだまだ発展途上であり、改善すべき点があまりに多いという事実を点検・評価結果は我々に痛烈に突きつけた、という表現が適切である。

しかし、東洋大学にとってこの改善すべき多くの事項は決して克服し難い「壁」ではないこともまた、強調しておかなければならない。120 年近い歴史の中で、東洋大学は様々な問題を克服し、発展を遂げてきた。今回の点検・評価結果は自らの目標とする姿との乖離を示すものであり、この距離は自らの責任において縮めていかなければならないものである。

さらには予想される大学基準協会からの評価結果に対しても、東洋大学は自らの持続的な発展のための一つの試金石として捉えていかなければ、本学の教育研究活動は我々自身が学則に掲げている「国家及び世界の文化向上に貢献しうる有為の人材を養成」（第 2 条）するという目的に照らして極めて非効率かつ非現実的なものとなると考える。大学評価の結果を踏まえ、さらなる発展に繋げていくことが、東洋大学の全構成員に課せられた使命であることを強く認識し、固い意志を持って臨んでいかなければならない。我々が大学基準協会からの評価結果を得る前から、既に自己点検・評価の結果を踏まえた改善活動を開始しているのはその決意の表れである。

東洋大学は平成 8 年に大学基準協会が開始した「相互評価」制度に第 1 号で申請、「大学基準に適合する」と認定を受けているが、その「相互評価」という仕組みは平成 19 年度から「加盟判定審査」とともに一本化され、新たな「大学評価」のシステムが行われることになっている。今回の申請は、期せずして大学基準協会における新しい制度の第 1 号ということになるが、今回の点検・評価にあたっても認証評価機関たる大学基準協会には厳格な評価をお願いしたい。

また、東洋大学は前身の哲学館が創立された時代より、広く社会からの支援を受けて発展してきた歴史がある。今回も広く社会から忌憚のないご意見を賜りたいと考えている。正会員として参画している大学基準協会からの厳格な評価、そして厳しい社会からのご意見に耳を傾けながら、大学の質的向上を自律的に図るという強い意志に基づいて行動することで、東洋大学は新たな局面を切り拓いていくことができる。そして、そのための活動はもう既に始まっている。

教育研究に関する評価・改善・企画委員会

副学長　疋田　聰